

[研究会記事] 山下文男さんを偲んで

立命館大学歴史都市防災研究センター 北原 糸子*

§1. はじめに

山下文男さんが昨年12月13日、87才で亡くなられた。陸前高田市に入院中に3.11の津波に襲われ、カーテンに掴まって辛うじて命拾いしたことは新聞記事で広く知られている。いくつかの紙面に登場した山下さん



は、「この体験を津波防災に生かす」と決意を述べられて、相変わらず、意気軒昂なところを示されていたのだ。しかし、津波によって痛めつけられた体は、新しい年を迎えるほどに持ちこたえることができなかったのだろう。津波の年の暮れに亡くなられた。山下さんは歴史地震研究会の熱心な会員であった。高齢の上に、掠れた声を振り絞るように様々な討論の場面で発言されていた姿からは、津波防災にかける情熱がほとばしるような感じを受けた。

歴史地震研究会から、山下さんの死を悼む詞を求められた。わたしがその任を果たすのに相応しいかどうかはわからないが、山下さんは、歴史地震研究会にとって大きな存在であったことを踏まえ、山下さんの業績の一部を改めて紹介し、その仕事の意義を再認識する機会としたいと考えた。

§2. 年譜と著作

以下は山下さんの簡単な年譜である。奥様の山下たき様に電話、手紙などでお伺いさせていただいたが、病氣療養中ということで、奥様から送られてきた山下さんの親しい友人牛山靖夫氏が書かれた『「津波てんでんこ」の山下文男さんを偲ぶ』という文章から、赤旗記者としての活動を引用させていただいた。

< 山下文男 年譜 >

1924年(大正13年)1月16日生まれ、綾里小学校

卒業、軍隊入隊(年次不明)、1946年日本共産党入党、48年から赤旗記者、赤旗文化部長、出版局長などを歴任、1985年退職、移行、全国を回り災害記録や証言の掘りおこしをして著作にまとめた。

以上の簡単な年譜と著作目録(北原作成)を照らし合わせると、名著『哀史三陸大津波』は在職中ではあるものの、その後、年を次いで発刊された著作のほとんどは、赤旗の出版局などを退職されてからの仕事であったことがわかる。それにしても、津波防災に向けて大変な仕事をこなされたと改めて思わずにはいられない。すべての著作に目を通す時間はなかったが、著作のうちには、3.11以降、今様の表現でいえば、大ブレイクしたとしか言いようもないほど、山下さんの本は広く一般の人々から求められたものが少なくない。大ブレイクの要因をなした事件はいうまでもなく、3.11の津波だが、それらの仕事は、下記の著作からわかるように、一時に出来上がったものではない。以下では、著書のなかから、山下さんの仕事の原点とはなんであったのかを考え、まさに山下さんの「津波に一生を捧げた」というに相応しい生き方に敬意を表したいと考えた。

< 著作目録 >

- 『哀史 三陸大津波』(青磁社、1982年)
- 『写真記録 近代日本津波誌』(青磁社、1984年)
- 『津波』(青磁社、1985年)
- 『防災講座 津波の心得』(青磁社、1985年)
- 『戦時報道管制下 隠された大地震・津波』(新日本出版社、1986年)
- 『綾里村鮑騒動始末記』(青磁社、1988年)
- 『地震予知の先駆者 今村明恒の生涯』(青磁社、1989年)
- 『津波 TSUNAMI』(あゆみ出版、1997年)
- 『昭和東北大凶作』(無明舎出版、2001年)
- 『君子未然に防ぐ』(東北大学出版会、2002年)

* 〒227 - 0062 横浜市青葉区青葉台2-33-2-B502
電子メール: itoko70@gmail.com

『津波の恐怖』(東北大学出版会, 2005年),
『津波と防災』(古今書院, 2008年)
『津波てんでんこ』(新日本出版社, 2008年)
『隠された大震災』(東北大学出版会, 2009年)
『昭和の欠食児童』(本の泉社, 2010年)
『哀史 三陸大津波』(河出書房新社, 2011年)

§3. 著書の自己紹介欄からみえる「山下文男像」

上に紹介した「年譜」はあまりにも短いものである
ので、以上の著作の末尾に書かれている著者の自己
紹介欄を2, 3のぞいてみた。すると、著作を重ねるご
とに自らを説明する言葉が進化している様子が窺え
る。まず、最初の労作『哀史 三陸大津波』では、自ら
を語ることは至って少ない。生年、生地、現住所の
みであった。

1924年(大正13)岩手県気仙郡綾里村(現三陸町)
石浜生まれ、東京の現住所(略)

次いで、2番目の労作、『地震予知の先駆者 今
村明恒の生涯』(青磁社, 1989年)では、前著と同じく、
生年、生地を記し、出版年までの著作を4冊挙げている。
このうち、『綾里村鮑騒動始末記』は挙げられてい
ない。津波とは題材が異なると考えたためだろうと思
われる。この今村明恒の伝記はもっと広く読んでもら
いたいと考えたのだろうと思われるが、東北大学出版
会で再版を果たした。ハードカバーであった前著とは、
タイトルも変え(『君子未然に防ぐ』)、軽装版として
2002年に刊行している。その自己紹介では、

1924年 岩手県の三陸海岸生まれ。祖母ら一族8人
が明治三陸大津波で溺死、自らも小学生の時、昭
和三陸大津波の恐怖と東北大凶作を体験。歴史地
震研究会会員として著作と津波防災活動に従事。

と、詳しく津波体験、凶作体験、歴史地震研究会会
員として防災活動に従事しているとしているのである。
さらに、『津波てんでんこ 近代日本の津波史』、
2008年刊行以来、6刷という好評を博したこの著作で
は、2002年の『君子未然に防ぐ』とほぼ同じ、以下の
ようであった。

1924年 岩手県三陸海岸生まれ、現在、大船渡市
綾里地区在住。明治三陸津波で一族9人が溺死、
自らも少年時代に津波や当方区大凶作を体験。
1986年以降、「歴史地震研究会」会員として著作と
津波防災活動に従事。

しかし、3.11以降、出版社を変えて2011年に再版
された最初の著作『哀史 三陸大津波』では、以下の
ように、自らをノンフィクション作家としている。そして、
それまでは、著作一覧に載ることがなかった『綾里村
鮑騒動始末記』なども載せ、幅広くものを書いてきた
ことを自ら示している。

地震、津波、災害に関するノンフィクション作家。著
書に、『近代日本津波誌』、『地震予知の先駆者今
村明恒の生涯』、『津波』、『綾里村鮑騒動始末記』
、『津波の恐怖』、『津波と防災』、『津波てんでんこ』
、『隠された大震災』、『昭和の欠食児童』

彼はここに至って、自らを作家と名乗り、これまで
の仕事で“防災”だけの“山下文男”から飛躍しようとし
ていたと思わせる節がある。

§4. 山下文男の原点とは

では、新聞記者を退職後、津波防災を中心とする
多数の著作を世に問うた山下文男の原点とはなにか、
その情熱の元にはなにがあったのだろうか。

著作の自己紹介で、みずから、「岩手県の三陸海
岸生まれ。祖母ら一族8人が明治三陸大津波で溺死、
自らも小学生の時、昭和三陸大津波の恐怖と東北大
凶作を体験」と書くところにあるだろうと思われる。そ
こで、『哀史 明治三陸大津波』初版を再読してみた。
本書の構成は、一. 『津波常襲海岸』の『宿命』、二.
『明治二十九年の大津波』、三. 『昭和八年の大津波』
、四. 『チリ津波と津波防災』の4章からなり、末
尾に附録として、明治三陸津波の岩手県調査を行っ
た山奈宗真の集落ごとの詳細な被害表を載せている
。

一. の『津波常襲海岸』の『宿命』では、自ら生
まれ育った三陸海岸は明治と昭和の2度の津波襲来
を受けた地帯であり、学術としての津波学のこの時期
の研究の現状を見渡して、津波学のこれからの進展
を期待する内容である。二. 以下では、郷里の綾里
村の明治三陸津波での犠牲者が村の人口の半分を

超える1,269人、あるいは1,350人という数値、あるいは一家全滅数軒の存在などから、明治三陸津波の死者数が『理科年表』で2万7000人となっている問題を指摘、死者の数の是正を促す仕事(『歴史地震』11号、山下論文参照)へ繋がる視点を獲得している。なお、後の著書では、三陸海岸地帯を津波「常襲」地帯ではなく、「常習」地帯に換えるべき意義を説いているが、ここでは、自らも三陸沿岸を津波「常襲地帯」と表現していた。

さて、余談風に挿入された一節として、鮑漁獲高日本一であった綾里村の漁場騒動(1926年)に描いた作家片岡鉄兵の『綾里村快拳録』に登場する実刑判決を受けた人物は文男氏の実父であったことが述べられている。山下氏の父親は漁師だが、綾里村出身のインテリ青年野々村善二郎が指導者となり、漁民と捕鮑組合との漁業権をめぐる闘争を指導、最終的には漁民の生活権獲得に沿った解決案で妥結した闘争と紹介されている。大正期には三陸海岸の村々にもこうした新しい社会的な動きがあったこと、それにもまして左翼、自由思想への弾圧も激しかったことなどにも言及する。

しかし、わたしが興味を戴くのは、そうした動きの先頭に立った漁民が山下氏の父親であったということである。それは、山下氏が戦後すぐに共産党に入党し、「赤旗」の記者としての道を歩んだこと、また、退職後の数々の著作に通底する社会正義を唱えるぶれない主張として受け継がれているのではないかと思ったからである。

三. の昭和八年三陸津波で、再び津波に襲われた三陸の村々が二度と村が立ち行かなくなるほどの犠牲を出さないためには、部落移転がもっとも確実な道だと説く地震学者今村明恒の仕事に出遭い、極めて強いシンパシーを表明している。そうした人物への共感が7年後に『地震予知の先駆者 今村明恒の生涯』として今村の生い立ちから、その終焉までを追いつつ、この学者として長い不遇ななかでも主張を貫き通して、晩年は私財を投じてまでも津波防災に身を挺した防災地震学者の一生を物語として結実させたと思われる。

四. はチリ津波と津波防災についてだが、この津波は山下氏は直接体験していないという。しかし、綾里村の平成の大合併で吸収された大船渡市はこのチリ津波で53人も犠牲者を出している。遙かチリから太平洋を渡って日本の沿岸を襲った遠地津波は近代に入って以降三陸海岸が経験した津波とは異なる

タイプの津波であったから、ここに新たな津波防災策と津波への新たな危険への認識を住民に促す必要が出てきたのである。

各章での山下氏の力点がどこに置かれているのかを見てみると、その後の数々の著作と津波防災の活動の原点は、まさにこの最初の記念すべき著作にあったと思われる。

2008年に初版、その後2011年6月には第6刷まで世に迎えられた『津波てんでんこ』では、それまでの津波防災の活動の集大成として、明治三陸地震、関東大震災津波、昭和三陸津波、東南海地震津波、南海地震津波、チリ地震津波、日本海中部地震津波、北海道南西沖地震津波を、ほぼ日本近代のなかで大きな被害をもたらした津波について、一般の人々が読んでわかるような平易な文章で綴り、啓発活動に務めている。

山下氏は学者とは一線を引きつつ、自らを市民目線の津波防災の立場で貫いた。

歴史地震研究会はまたと出会えないこの異色の会員を津波災害で失った。会員諸氏の残念至極の思いも強い。深い哀悼の意を表する。

『歴史地震』 山下文男執筆論文一覧

- 山下文男, 1995, 明治三陸津波の死者数と重傷者数の関係-男女の比率などについて, 歴史地震, 11, 107-111.
- 山下文男, 2000, 明治(1896)三陸津波の死者数と文献上の混乱, 更に, 服部一三・岩手県知事の被害報告について, 歴史地震, 16, 89-98.
- 山下文男, 2000, 『今村明恒伝』余録, 歴史地震, 16, 216-225.
- 山下文男, 2001, 明治三陸津波(1896年)に関する一部, 捏造された史料について, 歴史地震, 17, 148-155.
- 山下文男, 2002, 明治三陸津波(1896)に関する「捏造津波石」問題始末, 歴史地震, 18, 177-180.
- 山下文男, 2002, 津波における「引き波の恐怖」 昭和三陸津波の死者数と行方不明者数の比率の意味するもの, 歴史地震, 18, 183-187.
- 山下文男, 2003, 三陸海岸・田老町における「津波防災の町宣言」と大防潮堤の略史, 歴史地震, 19, 165-171.

山下文男, 2005, 続・津波における「引き波の恐怖」
明治三陸津波1周年後の岩手県「海嘯始末二
付申報」について, 歴史地震, 20, 145-148.
山下文男, 2005, 溺死者の最多は子供と老年世代
昭和三陸津波と北海道南西沖地震津波の場
合, 歴史地震, 20, 165-168.
山下文男, 2007, [講演記録] 明治・昭和
三陸津波の歴史的教訓, 歴史地震, 22, 19-24.
山下文男・小松原琢, 2007, 『津波いろは歌留多』

について, 歴史地震, 22, 169-174.
山下文男, 2008, [講演要旨] 明治三陸津波(1896)
による綾里・白浜での津波駆け上がり地点を巡る
誤解と誤報を正す, 歴史地震, 23, 154.
山下文男, 2009, [報告] 大船渡市洞雲寺内の明治
三陸津波[1896・6・15]の犠牲者を弔う『丙申大海
嘯溺死者諸精霊等』に就いて, 歴史地震, 23,
157-170.

【幹事会より】

上記の公表論文のうち, 山下(2007)は, 2006年9月に岩手県大船渡市で歴史地震研究会が開催された際の一般講演会における山下さんの講演録です。山下さんの考え, 思いが分かり易くまとめられていますので, 是非ご一読ください。



2006年大船渡大会巡検での一コマ。明治三陸津波の最大
遡上高記録地点(綾里, 標高 38.2 m)で説明される山下さん
(中村操氏撮影)。